

コロナ禍におけるICTを活用した古典の授業実践

—Classi v Zoom の活用を通して見えた可能性と課題—

櫻井礼子

はじめに

二〇二〇年の春、自分を含め誰もが予想だにしなかった事態が訪れた。新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐための、全国の学校の一斉休校である。どの学校も対応に迫られ、今後の教育活動、特に授業による学びをどのように保障していくかということについて頭を抱え、幾度となく会議を開き、未曾有の事態に何とか対応しようとしたことであろう。『月間国語教育研究』においても二〇二一年二月号・三月号と二号に渡って臨時特集が生まれ、「新型コロナ時代」における国語教育の可能性と課題について多くの論稿・実践報告が寄せられたのは記憶に新しい。

二〇二一年度現在においても、新型コロナウイルス感染症という未知なるものの拡大状況が予想できない中で、学習者である生徒に対してはどのような活動までなら行わせてよいのか、そして、

そのような制限の多い中で確かな学力を育成することができるか、暗中模索の状況は続いている。長引くコロナ禍を幸いとは決して思わないが、この約一年半を振り返ってみると、「ウィズ・コロナ」「アフター・コロナ」における教育として、特にオンライン授業をはじめとするICT活用の必要性と可能性に大きな注目が集まったことは意義深いことでもあると考える。

今回の執筆にあたり、筆者は「ICTを活用した教室外での授業の可能性」を軸に、二〇二〇年度の授業と学びの保障の関する取り組み・事例として「オンライン授業期間中における高校一年生の古典の指導」の実践報告をさせていたいただきたい。今と違って「このような授業づくりも可能だったのではないか」と思うことばかりであるが、学習者の学びの保障のために「今あるもの・今使えるものを活かして授業をしよう」を合言葉に試行錯誤した一例と捉えていただければ幸いである。

11・1 教育プラットフォーム [Classi]

オンライン授業・対面授業どちらの授業実践においてもこの「Classi」という教育プラットフォームが欠かせないものとなったため、授業実践報告に先駆けてこのClassiについて説明をしておきたい。Classiは教育プラットフォームの開発・運営を行っているClass株式会社によって二〇一四年四月よりサービス提供が始まった、「コミュニケーション、探究学習、学習動画、日々の学習記録など、学校生活のさまざまなシーンで活用」ができる教育プラットフォームである。Class株式会社の調査によると、高校・中高一貫校のうち、Classの有料導入校は三〇〇校を超え、二校に一校が導入しているとのことであり、学校教育関係者の中では徐々に認知度が上がっている教育プラットフォームであるといえる。ポータルフォリオ機能や学習動画機能、欠席連絡機能等さまざまな機能を備えているが、本稿では「アンケート」・「webテスト」の二つの機能を取り上げて、教科授業での活用方法を紹介したい。

11・11 [Classi] 機能―「アンケート」

この「アンケート」機能は「アンケート」という名称から分かる通り、本来教科の授業内で使用することを意図とした機能ではない。だが、このコロナ禍を機に、オンライン上でも記述式ものを学習者と授業者でやりとりをするために筆者なりに教科授業での使用にアレンジすることを試みた。

授業内では主に振り返りや授業での取り組みの記録として使用

したが、残念ながら字数カウント機能が装備されていないため、字数指定が必要になる課題には向いていない。だが、利用していく中で、学習者が「提出」をしなくても、「一時保存」をすることによって、入力途中の内容を配信者（授業者）が確認できるということが分かった。これにより、記述式で問いたい授業内の発問もアンケート機能を利用してその場で解答してもらうことで、近距離の対面式のグループ活動をしなくても授業内で他者の意見や考えを授業者から紹介し、共有をすることができるようになった。この方法を用いて途中の状態の解答にアドバイスをすることを通して、解答を完成させようと頑張る学習者が増えた。

11・11 [Classi] 機能―「webテスト」

「webテスト」の機能は予め授業者が作成したテストを配信すると、自動採点や平均点算出・設問別正答率算出・順位付け等を行ってくれる機能である。しかしながら、作成者が予め設定した正答に一字でも異なると、正答とみなせる内容でも誤答として扱われてしまうため、「短答式」「記述式」問題には不向きである。「記述式」に至っては解答者の自己採点になるので、テスト解答画面上には「○」「×」しか残らず、学習者がどのような解答をしていたのかすら確認ができない。だが、何度でも解き直しができるため、単語や文法知識等の基礎知識の定着を図るものとして筆者はオンライン授業・対面授業いずれにおいても活用を推進していった。また、筆者は授業外の課題としてwebテストを設定し、授業時間内にはテストを実施しないという方法を取ったこともあった。

これにより授業内に小テストにかかる時間を他の活動や指導に充てることも可能になった。このように、webテストの有効性や利便性は高いものであるものの、実際にはペーパーテストをなくすることは難しく、web式(デジタル式)と目的や内容のすみ分けを行いながら併用していくことが現実的である。だが、高校生について言えばBYODが達成されている勤務校においては、小テストレベルのものはwebテストを軸にしてペーパーテストのほうを補完的に用いていくというのがいずれば可能になるのではないかと考える。

三・一 ClassiとZoomを活用した国語科授業実践事例

「オンライン授業期間中における高校一年生の古典の指導」の概要

これから紹介する実践事例は、筆者が勤務校の高校一年生「古典」の三クラスを対象として二〇二〇年度の三学期に行ったものである。新型コロナウイルスの感染者数の増加もあり、学校判断によってオンライン形式での授業が始まり、単元の途中で対面形式の授業に切り替わった。よって、本単元は第一次～第二次の途中までをオンライン形式、第三次～第五次を対面形式で行った。三クラスはホームルームクラスとは別の英国数理社の授業のみのクラスで、成績の上位三分の一を一クラス、その他の三分の二を均等分割して二クラスに分けている。学習者は全員が同じタブレット(Surface Go 2)を個人で購入して所有しているため、本実践もそれを前提として進めた。勤務校において、オンライン授業を

行う上で使用したのはおそらく最も知名度の高い「Zoom」というシステムであるため、基本的な機能についての説明は割愛させていただくこととする。まず、実践の概要を示したい。

【単元名】「平家物語」における巴の存在意義とは

(十二時間扱い)

【単元の目標】

- ① 重要古文単語や文法知識を活かして本文の解釈や現代語訳ができるようになる。
- ② 「巴」(教科書教材)と「木曾の最期」を漫画や能の謡曲等との読み比べを通して、『平家物語』で描かれている巴・木曾義仲・今井兼平の人物像について考え、理解を深める。
- ③ 「平家物語」における巴という登場人物の存在意義について考え、自分なりにまとめる。

【教材】

- ① 『平家物語』より「巴」(教科書教材)―教科書は『新精選 国語総合(古典編)』(明治書院)を使用。
- ② 『平家物語』より「木曾の最期」(教科書に掲載なし)。
- ② 『マンガ平家物語下巻』(朝日新聞出版 二〇二二年)
- ③ 謡曲「巴」口語訳―「the能ドットコム」というwebページ(<https://www.the-noh.com/jp/>)から引用し、授業用資料とするために、必要に応じて授業者がルビを振り、フォントを変更する等の編集作業を行った。

【単元の展開】

第一次「巴」の本文理解

重要単語や助動詞、敬語の知識について新出事項の学習や既出事項の確認をしつつ、本文の内容と口語訳の仕方について学習をする。(二時間扱い)

第二次 漫画教材との読み比べ

「巴」の場面が漫画化されたものを読み、その共通点と相違点、また、巴と義仲の人物像について個人レベル・グループレベルの二段階で考え、ワークシートにまとめて発表をする。(二時間扱い。授業外の課題としての時間も含む。)

第三次 「木曾の最期」の本文理解と「巴」との読み比べ

重要単語や助動詞、敬語の知識について新出事項の学習や既出事項の確認をしつつ、本文の内容と口語訳の仕方について学習をする。また、「巴」との読み比べを通して巴・義仲・兼平の人物像について考える。(五時間扱い)

第四次 謡曲「巴」との読み比べ

授業者作成の謡曲「巴」に関するプリントを読み、『平家物語』の「巴」「木曾の最期」との共通点と相違点について個人レベル・グループレベルの二段階で考え、ワークシートにまとめる。(二時間扱い)

第五次 単元のまとめ

『平家物語』における巴という人物の意義はどのようなもの

か」というテーマで各自レポートを作成し、Class上に提出をする。(第十二時終了後)

三・二 教材とつづの「巴」と「木曾の最期」について

主たる教材としたのは『平家物語』の「巴」という有名な部分である。筆者調査によると、「巴」という単元を設定している教科書は勤務校で採択している明治書院のみであり、その他の教科書は「木曾の最期」の中に「巴」の部分を含む採録となっている。^(注3)「木曾の最期」は『平家物語』の中では最も国語総合の教科書に採録されている部分であり、平成二十八年検定版の国語総合の教科書において、「木曾の最期」の採録のない教科書は全二十四冊中たったの二冊である。^(注4)その採録状況や古典教育における「木曾の最期」の指導のあり方については大津雄一氏の見解が非常に興味深い^(注5)が、紙幅の都合上、それについては機を見て別稿にて述べることにしたい。

本実践においては義仲と巴、義仲と兼平という二つの関係性、そしてそれぞれの人間性について考えさせつつも、単元の軸としたのは「なぜ義仲は巴を逃がしたのか」という問いである。この問いに対しては、「戦に女を連れていては恥になる」という義仲の発言が言葉通りのものではないことを考えさせ、「愛する巴に生き延びてほしい」という思いを読み取らせるといったことが一般的な指導であると思われる。だが、その際にどうしても義仲の人物像が固定化されやすい。特に、勤務校で採択している明治書院の教科書では「巴」の場面しかなく、巴が落ちていった後の「木曾の

最期」の部分の掲載がないため、教科書教材のみを扱えば、その傾向はより強くなると予想される。よって、使用教科書である明治書院の『新精選 国語総合〔古典編〕』には「巴」「坂落」「能登殿最期」が採録されていたが、「坂落」と「能登殿最期」については扱わず、「巴」の部分を含む「木曾の最期」を掘り下げて単元を实践することとした。教科書に掲載のない「木曾の最期」の部分や能「巴」の謡曲口語訳については別途プリント教材として配付し、「巴」の場面と併せて巴・義伸・兼平の三者の人物像や巴という人物の『平家物語』における意義について考えさせることとした。なお、本稿においては主にオンライン授業形式となった第一次と第二次のうち、第二次に焦点を当てて紹介をさせていただく。

三・三 授業の実際―第二次 漫画教材との読み比べ―

第二次は、主にZoomの画面共有機能とブレイクアウトルーム機能を活用して展開した。ブレイクアウトルーム機能は、Zoom上で参加者を少数人数ごとのグループに分けることができるものである。教室でのグループ活動では他のグループの話す内容が聞こえ、それに左右されて話し合いが進行したり脱線したりすることがあると思うが、ブレイクアウトルームであれば他のグループの声が聞こえてくるといことがないため、それぞれのグループの話し合いに集中することができる。これは大きな利点であると考ええる。

本実践においては、第一次で「巴」の場面の内容理解を終えた後に漫画資料として『マンガ平家物語 下巻』の「巴」の場面を抜粋して学習活動を行った。学習者は画面共有で示された漫画を授

業者の台詞音読と共に確認し、その後ワークシートで指示された活動に個人レベル・グループレベルの二段階で取り組んだ。発した問いは『平家物語』の「巴」本文と漫画の「巴」の場面との読み比べを通して、「その1『平家物語』本文と漫画との共通点と相違点を整理しよう。」「その2 その1で確認したことについて、どのような意図があったためと考えられるか書こう。また、漫画の良いところ・悪いところについても整理しよう。」「その3 一回考えた『なぜ義伸は巴を逃がしたのか』という問いについて、改めてどう考えるか書こう。」の三つである。なお、漫画資料については最初は画面共有機能で提示したが、その後のZoomの校内グループ機能を利用して漫画資料のコピーをPDF化したものを配信し、学習活動に取り組み際に学習者各々が何度も自由に見返すことができるようにした。

漫画のようなサブカルチャーを活用した授業実践はこれまでも多く報告されており、さまざまな活用の仕方がある。筆者は、単元構想の当初は、受け身になりがちなオンライン授業において、教科書における「巴」の場面の理解を深めたり、興味関心を高めたりするために、学習者にとって身近な漫画を教材として使用しようと考えた。だが、『平家物語』の漫画を探している中で、興味深いことに気づいた。それは描かれている場面について、教科書との差異が見られたことだ。筆者の想定に反して、「木曾の最期」の中で巴が落ちていく場面の後の「今井四郎、木曾殿、主従二騎……」以降が描かれていないことが多かったのだ。その点に着目し、本実践においては敢えて「巴」の場面のみで義伸と兼平のや

り取りや死については省かれている漫画を使用し、『巴』の場面が詳細に漫画化された一方、義仲と兼平のやり取りと死の場面はナレーションのみに変換されたということにどのような意図があったのか」ということについても考えさせた。

漫画教材の使用については、「オンライン授業だとしても受け身になりがちだったけれど、漫画との読み比べは楽しくて積極的にやれた」という感想が寄せられた。一方、「漫画はおもしろかったけれど、考える内容は難しかった。一人で考えているときに分からなくなっても、先生が教室での授業のように様子を見に来てくれたりすることもないので、途中で集中力も切れてだらけてしまった。」という声もあり、現在のオンライン授業の限界と課題を実感した。ブレイクアートルームでも授業者が各ルームに参加することで指導をすることはできる。だが、個人レベルでの活動をしている際には対面授業のように生徒の様子を一望しながらサポートが必要な生徒を見つけて近寄り、声を掛けていくということではできない。個々の生徒に必要な指導を即時的に行うことのできる対面授業と比べると、オンライン授業では個人の取り組みに対しての声掛けがどうしても減ってしまう。また、これは本実践中に機能を利用しながら知ったことであるが、ブレイクアートルームでは各ルームのメンバーはメインルームからは退出しているというような状態になるため、各ルームからメインルームまたはいずれかのブレイクアートルームに参加している授業者に対してメッセージを発することができない。対面授業であれば学習者の方から挙手等して授業者に助けを求めることができるが、それ

ができないために話し合いが止まってしまい、沈黙が続いていたグループもあった。また、各時の終了後にCanvasのアンケート機能を使用し、グループで話し合ったことであっても個々にその内容について提出をさせたが、同じグループの話し合いに参加しているはずであるのに、グループでの話し合い内容の記録にはかなりの差異が見られた。語彙力・表現力の個人差はもちろんあるが、やはり個々の取り組みについての把握や個別フォローが甘くなってしまうという課題が浮き彫りとなった。各グループの話し合い内容のクラスレベルでの共有・交流については、校内グループへの「コメント投稿」の機能を用いて提出させる形で行い、さらに学年レベルでの共有については各グループの発表内容を授業者がまとめたものをCanvasの校内グループに投稿する形で行った。その内容に関する課題は出さなかったが、最終的な課題となったレポートをまとめる際に参考にした学習者が多かったようである。

四 コロナ禍における単元実践の成果と課題

本実践はICTを活用しつつ、オンライン授業であっても学習者の主体的な参加とそれによる学習効果を意図したものであったが、成果以上に反省点・課題が多く残ったように感じる。成果の一つは、漫画教材の魅力と可能性を改めて見出したことだ。受動的になりやすいオンライン授業において、学習者にとって身近な漫画を教材として用いたことで、生徒の主体的参加や学習意欲の向上が見られた。また、それだけではなく、『平家物語』本文と漫画との読み比べを通して、巴という登場人物の『平家物語』にお

ける意義、ひいては『平家物語』自体の意義について多角的かつ深く考えさせることへの一助となった。もう一つの成果はOBSの活用を軸に進めていたため、オンライン授業から対面授業に切り替わった際にも展開に大きな変化が生じず、スムーズに単元を続けていくことができたことだ。「ウイズ・コロナ」「アフター・コロナ」における授業はICTを積極的に活用していくことでオンライン授業と対面授業との間にある溝を埋め、日常的にハイブリッドな授業を意識していくことが重要であると考える。

一方、反省点として筆者が最も感じたことは、発問内容の吟味や、その発問が学習者の国語力の向上に結びついているかの検証を怠ってしまったということだ。授業づくりにおいて肝となることだが、オンライン授業という形式の中でシステムのなところやZoomの目新しい機能を活用しようと躍起になって、基本的なことを疎かにしまった部分があった。また、Zoom中は顔を映してもらうことになってしまったため手元が見えず、生徒の作業の進み具合が見えにくかったために話し合いの時間を予定よりも延長し、全体として単元の時数が増えて間延びしてしまったことも大きな反省点である。オンライン授業と対面授業の融合を目指しつつも、オンライン授業の特性・短所に十分に留意した上で授業計画を立案していくことの重要性を痛感した。

五 おわりに

コロナ禍は今なお続き、学校現場における新型コロナウイルスとの格闘は長引きそうである。だが、だからこそ、どのような事

態に置かれても学びを止めない工夫を常に行い、できること・選択肢を増やしていくべきだ。特に、ICTの活用については個々の教員の力量がかなり異なるものである。勤務年数や教科の枠を超えて知恵を出し合い、研修等を通して学校全体でICTの活用方向上に取り組んでいくことが急務である。筆者の勤務校は都内の私立校であり、多少の差はあっても環境を整えてもらうことが可能である。よって、オンライン授業が再開されたとしても、工夫次第でできることも増やしていけるだろう。だが、公立校や地方の学校では家庭の環境整備が最初の課題となることも多いはずだ。そのような困難な状況下でも何とか授業や学びを成立させようと腐心する教員に対して、多くの学習者は協力的で、どんな新しいツールややり方にも、ものの数回で慣れていくということをこの約一年半強く感じてきた。子どもたちの持つ「柔軟性」という可能性が、ICT活用や「ウイズ・コロナ」「アフター・コロナ」における学びの可能性に直結すると考える。オンライン授業の認知や実施の普及に伴い、学校という場、教室という場での学びへの不要論も散見されるようになった。だが、少なくとも筆者の周囲の学習者は対面授業での友人や授業者との関わりを強く望んでいる。コロナ禍を機に学校教育は大きく変わっていくであろうが、教室での授業の価値を常に問い直し、更新し、そしてそれを学習者が実感できるように提供していくことが何よりも重要なことであると筆者は考える。

注

- 1 Classi@HP (<https://class.jp/about/>) (二〇二一年九月現在) から引用。
- 2 筆者の調査では、平成二十八年検定版の「国語総合」の教科書の二十四冊(「現代文編」となっているものを除いてある)のうち、「巴」の部分を含む「木曾の最期」の部分を掲載しているのは十八冊であり、「巴」の部分を除いた「今井四郎、木曾殿、主従二騎……」からの「木曾の最期」の部分を掲載しているのが四冊であった。
- 3 注2同様、筆者の調査では、「木曾の最期」の部分について一切掲載がなかったのは二冊であるが、一般的に「木曾の最期」と認識されている部分の中の「巴」の場面のみを抜粋し、義仲と兼平の二人になった場面以降を掲載していないものが二冊あった。
- 4 大津雄一『挑発する軍記』(勉誠出版 二〇二〇年)の第二章「『平家物語』に惚れさせない」を参照されたい。
- 5 サブカルチャーの教材化や授業実践の研究については町田守弘氏が第一人者であり、『サブカル×国語』で読解力を育む(岩波書店 二〇一五年)においても3―1「マンガ教材の可能性」にてこれまでの実践の紹介とともに漫画教材による学力育成の可能性と課題について詳細に述べている。

(目黒星美学園中学高等学校)